

岐阜女子大生を対象とした岐阜弁の影響力に関する調査 ～調査データのマッピングによる分析～

安藤 早紀、谷 里佐 (岐阜女子大学)

1. 全国から学生が集まるという岐阜女子大学の特長を活かした研究

筆者(安藤)が岐阜女子大学に入学し、驚いたことの一つが、全国から学生が集まっていることである。各学生の出身地域が異なることで、地域ごとの歴史や文化に触れる機会も多く、貴重な体験ができたが、その中でもとくに新鮮に感じたことが“言葉”＝方言である。高等学校までの学生生活では、同級生らは同じ県内出身がほとんどであったため、大学生活では、他地域出身の学生と会話したときの会話の語尾の違いさえも興味深く感じた。

そのような中、疑問を持ったことが、岐阜県外出身の学生は、岐阜女子大学に入学後、大学生活の中で知っている岐阜弁は増えていくのか、また、大学生活の中で岐阜県出身の学生や教職員の話す方言を聞いている内に、岐阜弁を無意識に、あるいは意識して使うようになっていくことはあるのか、ということである。

そこで、全国から学生が集まる岐阜女子大学の特長を活かし、岐阜女子大生を対象とした岐阜弁についてのアンケート調査を実施し、調査データのマッピングによる分析を行うことで、その特性を見出したいと考えた。

2. 岐阜弁について

岐阜弁とは、岐阜県の方言である。

岐阜県は東西方言の境界地帯に位置し、本州のほぼ中央にある内陸県である。7つの県と隣接しているため、各方面から影響を受けている。県内の方言は大きく分けて2つ、飛騨地方の方言「飛騨弁」と美濃地方の方言「美濃弁」である。岐阜弁としての方言は岐阜県内でも飛騨地方と美濃地方で若干異なる。本調査で対象とする岐阜弁は、岐阜女子大学が位置する美濃地方に限定した。

3. アンケート調査と分析

アンケート調査は、岐阜女子大学文化創造学部の学生を対象に実施し、1年生から4年生まで

の120名から回答を得た。調査結果の一部を紹介する。

いくつかの岐阜弁について、「使ったことがある」・「聞いたことがある」・「知らない」かを聞いた回答が図1である。「かしわ」と「(米を)かす」は知らない人が多かった。これらは、大学生活の中で使うことがあまりない言葉でもある。一方で、普段の会話や行動によくあらわれる言葉である「あかん」・「えらい」・「(鍵を)かう」は、使ったことも聞いたことも多いという結果であった。

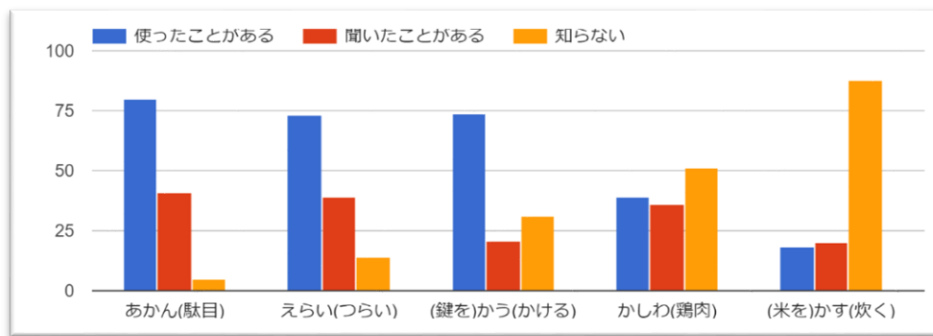


図1 岐阜弁に関する調査

また、調査対象とした岐阜弁について、家族からの影響を調べるため、「両親が岐阜県民」・「片親が岐阜県民」・「両親が県外出身」などに分けて、認知度や使用度の4つの指標でマッピングした結果(図2)、「両親が岐阜県民」の認知度・使用度は高い結果であったが、「両親が県外出身」の学生の中にも、岐阜弁の認知度・使用度ともに高い学生が何人か見られた。これに起因するのが、岐阜女子大学の環境ではないかと考えたが、特定には至らなかった。

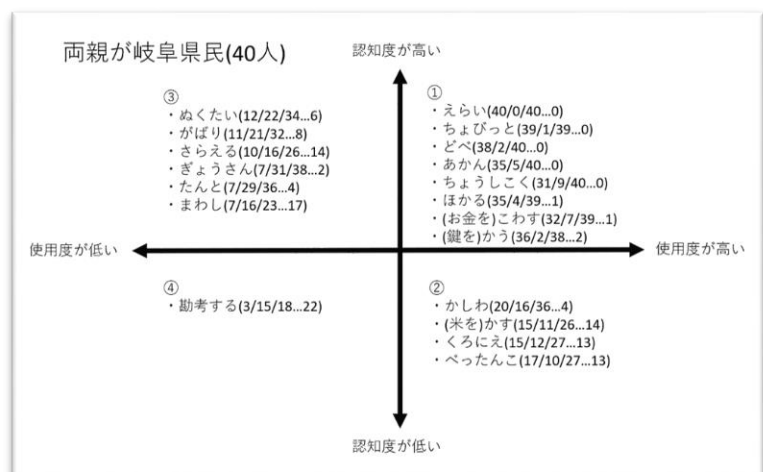


図2 マッピング調査 (一部抜粋)

なお、アンケート調査の自由記述欄には、「意外と周りの人が使っていて、それが岐阜弁なのだ」と知った。沖縄の友達が約2年間岐阜に住んでいて、その人と話す時に岐阜弁を使っているなど思った。「彼女もないちゃー(内地の人間)になったのか!」と思った」や「岐阜弁だとは思っていなかった方言が何個かありました」のような意見が寄せられた。岐阜弁を大学生活の中で意識せずに使っている、聞いているという様子が窺えるが、方言が、もともと、人から生まれ、周辺地域や環境の影響を受け、広がり、変容し、定着していくという特性を持っていることを示していると思う。

(本稿は、安藤早紀学士論文(令和3年度受理)「岐阜女子大生を対象とした岐阜弁の影響力に関する調査」から、調査結果の一部を元にまとめたものである)